N：ナラティヴとケア

*Japanese Journal of N: Narrative and Care*

【別刷】

**ご注意：**

- 本 PDF ファイルは，遠見書房刊『N：ナラティヴとケア』誌の掲載論文の別刷 PDF です。Adobe 社の Acrobat ver 4.0 以降で閲覧できることを確認しておりますが，その他ソフトだとうまく読めない場合もあるかもしれません。
- 本 PDF の配布権は，執筆者の方に一任しております。第三者による配布も，執筆者の許可があれば可能です。
- HP などへの半永続的な掲載は，出版権の問題なども起こりかねますので掲載前にご相談ください（自身の HP などへの 1 カ月ほどの限定期間を設けた掲載は問題ありません）。
- 大学図書館や学術検索センターなどへの PDF の全文掲載は，これを認めませんので，あらかじめご了承ください。
- 本ファイルおよび制作に使用したコンピュータは，ウィルス検索ソフトにてスキャンしており，通常の使用法では不具合が生じる可能性は考えられませんが，このデータを用いたことによる結果について，著者ならびに小社では責任を負いかねますのでご了承ください。

# N: ナラティヴとケア

第2号

2011年1月

*Japanese Journal of N: Narrative and Care*, No.2, Jan. 2011

目　次

## ❖特集：カルテを書く――医師にとっての「究極」のナラティヴ

医師にとってカルテとは何だろうか？……（山梨市立牧丘病院）古屋　聡　3
歴史とカルテ：地域とともに歩んだカルテ――カルテと患者さんと私の物語
……（おおい町国保名田庄診療所）中村伸一　8
歴史とカルテ：医院とともに歩んだカルテ……（田路クリニック）田路　了　15
対話とカルテ：生活習慣病とカルテ……（国保藤沢町民病院）松嶋　大　22
対話とカルテ：東洋医学とカルテ……（羽生総合病院和漢診療センター）高木恒太朗　29
対話とカルテ：悪性疾患とカルテ……（独立行政法人国立病院機構四国がんセンター）大中俊宏　41
ツールとしてのカルテ：コミュニケーションツールとしてのカルテ――在宅医療における
ICTの活用法……（ナカノ在宅医療クリニック／鹿児島大学医学部）中野一司　47
ツールとしてのカルテ：エデュケーションツールとしてのカルテ
……（国立病院機構名古屋医療センター）川尻宏昭　53
身体と言語とカルテ：言語化とカルテ……（京都大学医学部附属病院）岸本寛史　58
身体と言語とカルテ：手術記録とカルテ……（西伊豆病院）仲田和正　65
エッセイ：口のなかとカルテ……（ふれあい歯科ごとう）五島朋幸　72
フィールドノートから考える医療記録……（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）野村直樹　73

## ❖リレー連載

私の実践とナラティヴ
①社会的現実が立ち上がるとき……（東京学芸大学）野口裕二　85
②共同研究という方法……（心理技術研究所）高橋規子　90

自薦式ブックレビュー
正岡子規著『病牀六尺』『仰臥漫録』……（東京武蔵野病院）江口重幸　95
伊藤哲司・山崎一希編『学校を語りなおす』……（滋賀県立大学人間文化学部）松嶋秀明　98
書評　ほんのほんとうのところ　上岡陽江・大嶋栄子著『その後の不自由』（北翔大学大学院・大正大学）村瀬嘉代子　100／ウィンズレイド＆モンク著／国重浩一他訳『ナラティヴ・メディエーション』（早稲田大学大学院）和田仁孝　101

ブックレビュー　102／次号予告　103／編集後記　104

特集：カルテを書く――医師にとっての「究極」のナラティヴ

# フィールドノートから考える医療記録（メディカル・レコード）

野村直樹 *

* 名古屋市立大学大学院人間文化研究科

## I　はじめに――書くということ

「書く」という行為が最近あらためて注目されている。でも，それはあまりにも当たり前なことで，深く考えることなく私たちは何かしら書き続けている――紙面に鉛筆で，画面にキーボードで，あるいは大空に希望の筆で。

文学批評では書くことを「エクリチュール」（Barthes, 邦訳 1999）と言うが，「書く」という行為はなにも文学に限らない。幼児も動物もなにかしら書く。ジュゴンは海底に「地図」を書くと言われる。そもそも遺伝子の配列が「書かれたもの」でなくて何であろうか。「書く」行為は哲学する人間だけの話ではないし，無文字社会には違った次元で「書く」があることだろう。

にもかかわらず「書く」ことに人々の関心が集まる理由は何だろう。それは，私たちヒトがふだん――書くことも含め――言葉でもって現実を形作っているからではないだろうか，たんに客観的現実を言葉に置き換えているだけではなく。20世紀後半以降，私たちはヒトの言語使用のこの側面に特に注意を払うようになった。弱者，マイノリティ，少数民族，異なった宗教から立ち上がってくる全く違って描かれる現実の多様性――それは今日の私たちが直面する社会の様相である。

## II　公的文書（パブリック・ドキュメント）と権威

何をどのように書くかは，それぞれのテーマ分野，活動領域における重要な議題となり，病気や障害を扱う医療の分野でもそういう問題意識が高まっているらしい。「らしい」と言ったのは，ぼくが医療者ではないからだ。医療記録（メディカル・レコード）を書かない医師・看護師はまずいないと思う。医療技術の進歩は目覚ましく，それにともなう複雑さと職種間連携の必要性から，より重要になってきているもの，それが医療記録（メディカル・レコード）ではないだろうか。カルテ（診療録），看護記録，介護ノート，保健師記録などがそれにあたる。

これらはすべて公的文書であり，医療にかんするいくつかの目的を持って書かれた記録である。また，ある資格を有した人でないと書くことができないものだ。ぼくなどはその資格がない。「書く」という行為にかかわることはできても，医療記録（メディカル・レコード）というものは書くことはできない――お医者さんごっこするんなら別だが。したがって，これらの公的文書には，書かれたものとして力，権威がある。

精神科医ミルトン・エリクソン Erickson, M. H. にこういう話がある。ある時，エリクソンは患者との面接の途中に「失礼」と言って場を中座した，カルテを自分の机においたまま。そのあとすぐ患者はよくなって二度と来なくなった。カルテには患者について「よくやっている。Excellent（素晴らしい）」と記されていた。カルテの「権威」を利用したのだった，患者がのぞき見ることを想定して（Zeig, 1985）。

## Ⅲ　人類学者とは

これを書いているぼくは人類学者をしている。未開社会の研究をおもに手がけてきた文化人類学も，現在では未開社会の消滅にともない，企業，学校，病院，宗教団体など，現代社会における集団や個人を研究しはじめた。ぼくは精神病院を研究した（野村・宮本，1995；野村 , 1997, 2001）。

人類学者の定義をご存知だろうか？　それには２つあるとぼくは思っている。１つは「自分は人類学者だ」と言う人のことである。この言い方はもっとも正確で哲学的な説明かと思われるが，周囲はあまり納得しない。医療者の場合，資格がかかわるからたとえ自分が医者だと言うだけでは十分ではない。２つ目が，「フィールドノートを書く人」というもの。フィールドノートとは現地調査をする人類学者が書く記録文書のことだ。こちらの定義の方が対社会的には理解してもらいやすい。それは「医療記録（メディカル・レコード）を書く人が医療者（医師・看護師）だ」という言い方に似ている。

しかし，医療者と言っても，過疎の村の訪問診療に通う医師と大学病院で先端医療にかかわる医師では取り巻く状況は大きく違い，介護に従事する看護師や地域で母子の健康を見る保健師の状況は同じ医療と言っても，職種も異なり，たいへん違った記録を書くことになる。医療の領域は広い，その定義付けはあまり意味をもたない。

## Ⅳ　ここでの目的

そこで，人類学者のフィールドノートの性格について話すことで，医療者のみなさんが医療記録（メディカル・レコード）について考える際の何らかの参考にしてもらえればよいと考えた。つまり，メディカル・レコードの定義や将来のあり方について，何かヒントにしてもらうものがあれば，ぼくとしてはうれしいのだ。だが，医療に関しては，知ってのとおり素人である。この話がフィールドノートに当てはまっても，メディカル・レコードには当てはまらないかもしれない。そのときはそのとき，「あちらの話」として一線を引いていただいてかまわない。

## Ⅴ　人類学者の仕事

フィールドノートについて話すためには，フィールドワークについてお話しする必要がある。フィールドワークは直訳すると「野良仕事」となるが，人類学者のそれは人を相手にした野良仕事である。つまり，特定の集団の中に自ら身を置きその場に参加したり観察したりして資料を集める現地調査である。人間にかかわるあらゆるテーマがその対象となり，調査の期間もまちまちだ。たとえば，アメリカ人類学の場合，ふつう最低１年の集中的な調査が学位取得のためには求められるだろう。むろん状況によってもっと長いものもあれば短いものもある。

何のためにフィールドワークをするのか。それはエスノグラフィー（民族誌）と呼ばれる報告書を書くためにである。人類学者の第一義の仕事はこれであって，この報告書が人類学者にとっての公的文書である。エスノグラフィーはある集団の日常生活を一定の枠組みから捉え，解説し，分析したものである。大学院にいる将来の人類学者はこの報告書が学位論文となる。エスノグラフィーを書くためのフィールドワークで書く個人的記録がフィールドノートである。その形式は書き手によって，テーマによって，また使用言語によって違ったものになる。

## Ⅵ　メディカル・レコードとフィールドノートの位置比較

では，ここでメディカル・レコードとフィールドノートそれぞれの位置づけを考えてみよう。メディカル・レコードは公的文書だと言ったが，フィールドノートはそうではない。エスノグラフィーとして提出された報告書が公的文書である。すると「書く」という視点からの図式はこうなるだろうか（図１）。

この図ではフィールドノートの対応関係が微妙である。医療において「非公的文書」にあたるものが何かぼくは知らない。メモや覚え書きその他があるだろうが，それが制度としてあるのかぼく

| ［実践１］ | ［非公的文書］ | ［公的文書］ | ［実践２］ |
|---|---|---|---|
| 診察，看護，介護 → | ？ | →メディカル・レコード→ | 治療 |
| フィールドワーク → | フィールドノート → | エスノグラフィー → | 再調査 |
| （現地調査） | （野帖） | （民族誌） | |

図１

はよく知らない。このプロセスは循環するものだと思う。

一つ言えることは，人類学者にとってはこの非公的文書であるフィールドノートこそ，彼や彼女が人類学者である証しになることだ。人類学者のアイデンティティがこのフィールドノートにある（Jackson, 1990）。

それはなぜだろうか。公的文書であるエスノグラフィーはすでに公に開かれ固定した文書（テクスト）としてあらゆる評価や再読，再解釈の対象となる――作者の手から離れたモノとして。これに対して，フィールドノートはどこまでも人類学者その人の所有物である。さらに，膨大なフィールドノートのほんの一部が公刊されたエスノグラフィーに過ぎないので，豊かなフィールドノートは，将来ありとあらゆる読み方，使い方の可能性を秘める。これを持っていることが人類学者でありつづける資源となるわけだから。「家が火事になったら，まずフィールドノートへ急げ！」なくしたらたいへんだ。これは人類学者には痛いほどわかるジョークである。

メディカル・レコードについてはどうであろう。それは医療者のアイデンティティなのだろうか。今日，電子カルテが普及し，フィールドノートもパソコンを使うようになれば上の心配はたんなる昔の語りぐさになるだろうか。

## Ⅶ　フィールドワークからフィールドノートへ

フィールドワークのしかたは，一部技術的なことを除いては，ぼくは教わらなかったし，アメリカでは教えないのが一般的であった。その昔，アルフレッド・クローバー Kroeber, A.L.（インディアン研究）が，フィールドワークの方法を聞きに来た若い女性に「君，まずノートと鉛筆を買うんだよ」と答えたのは有名な話だ。フィールドワークは，ぶっつけ本番式（swim or sink；泳ぐか沈むか）の方法でしか学べない。それは，ある人の方法を自分が使えることは稀だからである。指導教官も大学院もそういうわけで教えない。また，フィールドノートの取り方もやはり教えないが，それは学生に新しい人類学のテクニックを発明して欲しいからだと言われている。

このことは実習と訓練を重ねる医療の事情と大きく違うところだろう。今日では，社会学者を中心に積極的にフィールドワークやフィールドノートについて教えようという機運が高まっている，ただ前述の理由により人類学者はそれにはあまり積極的になれない。医療ではそれぞれの分野でどのような記録のしかたが求められているのだろうか。

## Ⅷ　フィールドノートの形式

人類学はとりあえず報告書を書くことで一定の目的を果たす。それを他の人や企業や政府が参考にすることで社会と結びつく。メディカル・レコードは医療者たち自らの実践とチームワークのためのものであり，その後の医療行為が本命なのだから，途中のプロセス・レコードは通過せざるをえないかもしれない。

しかし「患者と距離をとるような方略が張り巡らされた現代のカルテの書式を用いて書いているうちに患者の苦悩，不安，病いの物語が視界から消えてしまう」（岸本 , 2011）というするどい指摘もある。もし「出会いを追体験できるカルテ」「患者の言葉が聞こえる看護記録」「医療者自身のリフレクション」などを残すとなると，その記述は非公的文書としてフィールドノートの性格に近くなるかもしれない。フィールドノートは，その時その場の状況（コンテクスト）にしっかり密着している。すぐれたフィールドノートには臨場感

がある。

とはいえ，フィールドノートが万能なわけではない。フィールドでの調査の経験すべてを記すことは不可能なのだ。言葉になりにくい経験が多くあるためだ。つまり実生活の「不可量部分」(Malinowski, 1922)が人と接する経験にはどうしても伴ってくる。例えば，その場の空気，人のもつオーラ，その時代の心理的傾向，文化のもつ隠れた前提など，これらは人類学者のフィールドノートにではなく，体で覚えるいわゆるヘッドノート（記憶，頭の中のノート）にアナロジックな情報として残される（Ottenberg, 1990）。それは言語化されないままのものだが，実はこのヘッドノートがフィールドノートの行間を読む際に威力を発揮する――このヘッドノートがあるからフィールドノートが読めるのだ。例えば，他人が書いたメモは言葉上わかっても意味が分からない場合があるのはその逆の例だろう。

フィールドノートにおいて，書き手と読み手は同じである（Bond, 1990）。メディカル・レコードでは必ずしもそうはならない。フィールドノートはつねに解答の源であるが，同時に疑問の源でもある。新たな理論から読み直す，「テーマで読む」から「人物で読む」ように読み方を変える，抜けた所を補充する，など将来書き換えの可能性を多く残す。小説も後から著者が書き換えることはたまにあるが，フィールドノートは書き換えを，そのあとの物語の展開を待っている，再調査を通して。だからフィールドノートは進化するテクストである。

一方，メディカル・レコードは，職種を超えた共通言語を用い，曖昧さや疑わしさをできるだけ排除したテクストなので，「疑問の源」だったり，考え込んでしまうものであってはならないだろう。しかし，メディカル・レコードも患者とともに変化し進化するとすれば，書き加えの可能性をもつ。終わりを想定しない，場合によってはしたくない，テクストであるから小説よりもフィールドノートに近いかもしれない。

書く内容（what to describe）をテクストとすれば，書く書式（how to describe）はテクストのテクストに当たるからメタ・テクストである。メタ・テクストは一種のテクストであるが，両者はいっしょに進化していく。一方を変えれば，もう一方も変わっていく（Bateson, 1972）。

## IX　フィールドノートの性質

報告書であるエスノグラフィーはある理論や仮説を念頭に書かれたものであり，その問題意識は時代とともに古くなる。ところが，現地の人や自分が観たものが記されたフィールドノートは,「歴史」が描かれているぶん，古くはならない。それはある時，ある場所のローカルな生活の 1 ページなのだから。

歴史について一言くわえると，フィールドノートはある場所の歴史ではあるが，いわゆる歴史家にとっての歴史とは違う。歴史家は自分で文書（もんじょ）を書いてはいけない，それは捏造（ねつぞう）になるから。人類学者は自分で文書を書かなくてはいけない，でないと剽窃（ひょうせつ）になるから。医療者もある人の歴史を自ら綴っている点では歴史家よりもフィールドワーカーに似ている。

現地の生活とローカルな（その時その場の）歴史が描かれたフィールドノートではあるが，まったく無私公平に書かれているわけではない。その時代の人類学理論や調査者自らの関心や傾向に彩られた主観的なもの，それがフィールドノートである。ぼくはかつて精神病院での会話や非言語のコミュニケーションを調査した。もしそれを政治集団，つまり，医師，看護士，患者などで構成する権力構造として観たら，同じ会話を記述しても結果は違ってくる。どちらもフィールドノートである。

たとえば，ミルトン・エリクソンがカルテの権威を使ったと書いたが，コミュニケーション的には，カルテに権威が「あった」のではない。この名高い医者に自分はどう映っているのだろうかという患者の心配や好奇心が，エリクソンの書き残した “Excellent” という言葉に出合って，彼女の意味世界を劇的に変化させたと言ったほうがいい。

コミュニケーションがあればそこには必ず変化があるが，変化を記述するには，患者のこれまでや，ここへ来るまでの経緯，エリクソンという医師への期待，中座するまでのやりとりの内容，などなど，二人の会見を取り巻く諸々の要因を丹念に書きおこしていく必要がある。「権威」や「権力」という概念でヒトのコミュニケーション現象を切るのは，細身の包丁の代わりに肉包丁で刺身をぶった切ろうというに似ている。切った断面が荒すぎる。

そういうわけで，文化人類学では濃やかで分厚い記述（thick descriptions）を残すことが求められる（Geertz, 1973）。それは，参加者にとっての経験に近い（experience-near）言葉で記す訓練のことである。これに対して経験に遠い（experience-distant）言葉が，学術的には権威ある言葉だが，権力や本能という概念での説明は経験からは遠く離れ，まさにその理由で記述も会話も打ち止めになりやすい。つまり「これは本能だから」と断じた後に続く発展的な言葉は少ない。

「疾患」もその意味では，概念上の性格からは「権力」や「本能」に近いが，その普遍的な概念は医療行為には必須であろう。しかし，人類学のほうでは普遍的な概念だけで書かれたフィールドノートは，動きや変化の記述に欠けるから，使い物にならない。メディカル・レコードはどうであろうか。疾患の概念は当然必需品だと思うが，それは個体の生理学を語るに適した言語であって，人のありようや人間関係を語るため言語ではない。

問題は，往々にしてそこに混同が起こることではないだろうか。ぼくの調査中にも，「彼女は～症だから」という疾患名が，その人の人間関係やコミュニケーションを形容する言葉として使用されることがしばしばあった。たとえば，「精神分裂症」（現在は統合失調症）は，個人の病気を語る言語だが，それはそのひとの人間関係を語る「関係性の言語」ではない。そのぶん病名は人間関係の内側にいる患者からみれば非現実的な言語に映るかもしれない。例えば，「過食傾向」「双極性障害」「受動攻撃性人格」から見えてくる人間像とはどんなものだろうか。それは一様に無味乾燥で生気を奪われた生活感に乏しい個の記述ではないだろうか。その際の書き手も同様になることだろう。

コミュニケーションや関係性を語る言語は別物なのだ，英語が日本語とは別のように（野村，2008）。科学的概念は多くの場合，静止言語であって変化や関係性を記述するのに適していない。関係性は日常生活の言葉をつかって表現できる，起きたことをふつうの言葉で記すことで。そういう言葉で語られた人物像は，「太っ腹兄ちゃん」であれ「変幻自在マン」であれ「キモかわいい娘」であれ，専門用語から離れて生活感をもって描かれる。そして，そのように書くことで書き手が人間味を帯びてくる（Anderson, 2001）。

## X　フィールドノートは いったい誰が書いたものか？

その答えはフィールドワーカーだと言ってもちろん間違いではないが，現在の文化人類学はもうひとつ回答を用意する。「書かれた人たち」である――つまり，インタビューされた人，観察された人，いっしょに生活した人，通訳してくれた人など，もろもろの情報提供者（インフォーマント）たちである。これらの人々もフィールドノートの著者に加えようという考えが次第に支持を得ている。

それは，フィールドワークの認識論が変化してきた現れで，記述はどこまでも解釈であり翻訳であると同時に，現地の人々とのコミュニケーションの結果，すなわち双方向のやりとりが生んだ共同制作物だとする考えである。それを「交渉された現実」（negotiated reality）とも言う。

メディカル・レコードもやはり「交渉された現実」なのだろうか。

以前，スタンフォード大学で行われた有名な研究に，全米各地に散らばる 12 の精神病院に 8 人の偽装患者が受診してみな同じことを言った，「声が聞こえてくるんです」と。訴えた内容はその程度だったが，精神病を疑われ全員が入院となった。8 人の中には精神科医も心理学者も含まれた。そ

して,「自分は研究のためにこうしている」と本当のことを入院中周りに伝え，そのとおりそこで起きたことをノートに取っていった。その「正常」な行動，しかし精神病院という場にそぐわない行動が,異常のサインと医療者からは受け取られた。さらに正常を主張すればするほど，協調性の無さと攻撃性を指摘され,病気の深刻さを疑われた。これは，当時の社会科学者を驚かしたスクープ的研究で，*"On Being Sane in Insane Places"*（異常の中に正常でいること）の名で発表された（Rosenhan, 1973）

これは診断が「交渉された現実」である極端な例ではある。しかし，たとえば「頭痛がする」というのも言葉であって，聞く側の経験ではない。カルテの標準として知られる，SOAP（subject, object, assessment, plan）の中の最初は，患者の主観，訴えであり，それが記録の一部になるわけだから，メディカル・レコードも多かれ少なかれ「交渉された現実」，つまり対話的な記録ということになる。

そう見ていくと，メディカル・レコードの中にも，フィールドノートの中にも，諸々の人々の声がひしめき合っている，聞く側の声もその中の一つとして。それはモノローグではなく，異なる声声が対立したり，ときには矛盾し合いながら，それぞれを主張している立体的なダイアローグであるはずだ（Bakhtin，邦訳 1975）。このような多声性がフィールドノートというテクストの特徴である。メディカル・レコードもそういう要素を持っているのではないだろうか。

フィールドノートは,「交渉されて」出来上がっていく記述であり，書かれていくテクストには対話的な要素がある述べた。その対話性はフィールドノートを読む際にも発揮される。文化のニュアンスや前提を生活で学んだ者が，みずからこの多声的で対話的なテクストを読む。そのとき，文字上にないリアリティ，つまり行間をダイナミックに読んでいくことができ，それがエスノグラフィーという文書を書く推進力になっていく。人類学者は，ノートを読み返しながら，その時のテープを聴きながら，時を超えその「場」に立ち返る。

## XI　ポストモダンのフィールドノート

人類学者はこれまでお互いフィールドノートについてオープンに話し合うということはなかった（関本，1988）。フィールドノートの妥当性，正確さが試されることは滅多になかった。これは「私がそこにいた，あなたがいたのではない」という圧倒的な優位に由来する。昔はイギリスから２カ月くらいかけてニューギニアに到着するほど調査地は遠かったのだ。さらに，人類学者は現地の文化や人々の行為を客観的に観察することができる知識と訓練を積んだ専門家であるというステータスもあった。

物事を客観的に描くことができると信ずれば，大まかな言い方だが「モダン」になり，科学至上主義はその代表だ。いっぽう，記述である限り真実も多様な描かれ方があり，科学はその一つにすぎないとすれば,「ポストモダン」ということになるだろう（Lyotard, 邦訳 1986）。1950 年に世界を驚かせた黒澤明監督の『羅生門』。事件の「真相」がいくつも描かれていくこの映画はポストモダンの認識論を先取りしていた。人類学の手法として「羅生門的テクニック」（Lewis, 1963）が，ポストモダンの世界観として「羅生門的現実」の概念が，この映画をもとに現れた。

フィールドノートを書いているとき，人類学者は人の言葉を記録したり，観て経験したことをそのまま書いていると思ってきた――自分のこととは関係なく。しかし,フィールドノートをよく読み直してみると人類学者はそこに自分の人生もいっしょに描かれていることに気づいた，たとえ「人生」が書き込まれていることを知るのが自分だけだとしても（Wolf, 1990）。

1970 年代，ポストモダンの思想は人類学を直撃した。19 世紀以来人類学が打ち立ててきた文化の記述にかんする信憑性は随所で疑われ，同時にフィールドノートの客観性はいっぺんに崩れ去った。人類学の使命は何だったのか。フィールドノートとは何か。これからの人類学とは。分野はか

つてない危機に見舞われた（Tierney, 2000）。しかし，ポストモダンの洗礼を比較的早い時期に受けた人類学は，他の社会科学に先んじてすすんでこの混沌の中に入って行った。新しいかたちのエスノグラフィーが試され，対話性を念頭に調査者自身も記述の対象となっていった（例：Crapanzano, 1980; Rosaldo, 1980）。

「記述は対話的に共同制作されるもの」という認識は書き手の姿勢に影響することだろう。この点を意識しただけで，ぼくたちの言葉選びも，文章形体も，長さも，語尾も，そしてもしかしたら，書く字の大きさまで，微妙に変化することと思う。

## XII　公開－非公開

ポストモダンを代表する価値観のひとつに「公開性」がある。医療記録と違い，フィールドノートは公的文書でないことを隠れ蓑に，インフォーマントについてどんな失礼なことを書いても外に出ることはなかった。マリノフスキーは人類学では神様のような存在だが，その個人的日記の中では現地人を野蛮人のように書いていた部分があり後にスキャンダルとなった（Malinowski, 1967）。

メディカル・レコードにはこのような問題はないのかもしれない。しかし，医療者の会話の中に，専門家同士のコミュニケーションの中に，それらは見当たらないだろうか。トム・アンデルセン Andersen, T. という精神科医は，家族療法で使うワンウェイ・ミラー（家族療法ではしばしばクライエントと面接者のほかにワンウェイ・ミラーの裏の別室から違うセラピストが面接を観察し適宜質問を行う）を逆照射にして，医療チームが家族について話すところを家族にも聞いてもらうという英断に踏み切った（Andersen, 邦訳 1997）。

これによって階層構造は吹き飛び，専門家たちの選ぶ言葉も表現形態も，微妙どころか大きく変化した。専門家だけのときの「あのお母さんだから，子どもはおかしくなるさ」は，そのお母さんを前にして「お母さんも子どもの変調に懸命に対応している」という具合に記述は変化する。公開することで医療者と患者は対等な関係の中で大きく表現を変えていった。情報はそれにより共有しやすくなった。

それは会話であれメディカル・レコードであれ，公開性はその内容に大きく影響する。公開性というメタ・テクストをもってくると，その場の会話や記述というテクストが大きく変わってしまうのだ。

公開性に関連して，人類学で起こった２つのことを記しておこうと思う。外国人として初めて日本で本格的なフィールドワークをしたのは，アメリカ人の人類学者ジョン・エンブリー Embree, J.F. である。27 歳のこのシカゴ大学の大学院生は博士論文を書くため，1935 年の秋から翌年の冬までの１年，熊本県球磨（くま）郡の須恵村に妻と幼い娘とともに滞在した。その報告書は，*“Suye Mura: A Japanese Village”*（Embree, 1939）として広く知られ，ルース・ベネディクト Benedict, R. もこの本を参考にして日本研究の古典となる『菊と刀』（Benedict, 1946）を書いた。

エンブリーに同行した妻も女性の見地から，また村の女性たちとの親交からたくさんのフィールドノートを残した。夫と娘の不慮の事故死ののち再婚した彼女は，ときを経て他の人類学者に彼女のフィールドノートを渡し，それをもとにして『須恵村の女たち』という名著が出来上がった（Smith & Wiswell, 1982）。これは著者の二人の協力関係なしではありえなかった，人類学では異例の報告書である。

われわれ人類学者にとってこの例は大切なことを教えている。つまり，フィールドノートは読み手を変えることで，本人がそれを使うこと以外に発展性を秘めているということだ。共有すること，いっしょに考えること，チームワークをとること。これらは前に述べたフィールドノートの性質上，個人プレイが主であった人類学にとって目新しいことだ。

いっぽう，メディカル・レコードの場合はどうであろうか。電子カルテのように，文書の共有は半ば現実になっているかもしれない，チーム医療には当然のこととして。公開性――それには限界

や範囲をあるとしても――それがもたらす変化と生産性は軽く見れない。開示請求という形の公開ではなく，患者とも共有するという意味での公開となれば，専門用語の使用は最小限に控えられ，日常のはなし言葉もつかって記述されることになるると思う。

もう一つの例。『バナナと日本人』（1982）や『ナマコの眼』（1990）で知られる鶴見良行は，東南アジアを歩いて日記式に克明なフィールドノートを書いた。日付が入り，その日見たこと会った人に始まり，スケッチを描き，写真を撮り，その場で採取したものをテープで貼り付け，考察したことを書いた。まさに「フィールドで考える」を実践した人であった。それらは，てらいのない生き生きとした文章であって，時には日本にいる妻に伝えておきたい日常の細々したことまで含んでいる。それらが，そのままフィールドノートとして公刊された（鶴見，2001, 2010）。鶴見良行のフィールドノートはそのまま公的文書になってしまったのだ。ある程度それを意識して書いていたかもしれなさそうだ，晩年は特に。しかし，これも異例なことである。

これが人類学に示唆することは，フィールドと公的文書（報告書）の間の距離を縮め，即興性，公開性，臨場感をともなう新たなエスノグラフィーの可能性を見せてくれることだろう。

これが医療に示唆することがあるとすれば何であろうか。観察と思考の過程がていねいに記述されていればそれは優れたフィールドノートだと思う。同時に，それは読んでいておもしろい。そのままの文書のよさがある，これを使って何かしようとしないところに。それは「いきなり公的文書」というかたちなのでメディカル・レコードに近いが，医療ははっきりとした目的を持って書くわけだから読み甲斐を感じさせることは二義的であろう。将来，読み甲斐のあるカルテや看護記録を読みたくなったとき，医療の分野が人類学を参考にしてくれるかもしれない。とにかく人と直接相対する点において――実験室で被験者を測る心理学者よりも，また質問紙で集団の動向を分析する社会学者よりも――医療者は人類学者に近いのだから。

## XIII　ナラティヴの時代のメディカル・レコード

医療のプロセスにはコミュニケーションが深くかかわる。どう記述し，どのような語りかけをしていくか考える作業が，語りをベースにした医療（NBM こと，ナラティヴ・ベイスト・メディスン）として知られる（Greenhalgh, & Hurwitz, 邦訳 2001）。この雑誌の特集もその影響下にある。

人類学者はこちらからフィールドに出かけて行くが，医療の場合は向こうから患者がやってくる，訪問医師や介護士は別だが。こちらが訪問客として相手を訪れることは，記述の観点からするとやりやすい。そしてもうひとつ大事なこと，それは相手を理解しようとした場合，絶対にこの方が有利である。なぜなら，好奇心を持って訪れるのがこちら側だとすれば，相手には余裕が生まれ，会話はなかばその土壌で進む。そして，相手をその社会的，物理的文脈（コンテクスト）でもって観察することができるわけだから。書き手は「尋問し検査する者」から「学ぶ者，教えてもらう者」へと移行し，それにともなって会話の質が変わっていく。フィールドワーカーに似てくるわけだが，こちら側の知らないことを教えて欲しいという構え，スタンスのことを「無知の姿勢」と呼ぶ（Anderson, & Goolishian, 邦訳 1997）。

ぼくは最近大学院でナラティヴ，語りをもとにした研究を指導する際，その報告書が 4 つの条件を満たすように求めることにしている。これらはメディカル・レコードにも参考になるだろうか。それらとは，

1）「私」が描かれていること。調査者は偏りやバイアスから解放された観察者ではない。どんな観察も観察者に依存している。そこで，私は誰で，どういう立場から，何を見ようとしているか。そういう「私」を記述として残すこと。
2）関係性が描かれていること。個人だけでなく「私」を含む人間関係が描かれていること。関係性を描くというのは，物事を構造の結果とのみ

考えないことにつながる。構造が関係を規定するのではなく，コミュニケーション，つまり関係のもち方が，構造（あるいは現実）を創っていく点を記述すること。

3）研究の終わりが関係の終わりでないこと。実証的研究では，研究が終われば，またはデータをもらえば，それで人間関係は中断することが多い。しかし，フィールドワークでは，公刊の後もインフォーマントに対しては倫理的責任を持ちつづける。このことを「倫理的証人」（Kleinman, 1988）とも呼ぶ。

4）ローカルな言語で語ること。ローカルな言語とは，専門用語を使わない日常言語，ふつうの言葉のことである。現地の人にもわからない専門用語で現地の人を語らないこと。ワンウェイ・ミラーを逆照射したアンデルセンのように，公開性を意識した言葉遣いのことである。

そうは言うものの，やはり医療の記述にかんしてぼくの貢献できるものは少ないかと思う。人類学は所詮人類学であってその目的は人の治療ではない。エスノグラフィーを書き上げることが目的であることはすでに述べた。フィールドノートは人類学者の素性（アイデンティティ）を証明するものだと言ったが，目的の前に立ちはだかる難所でもある。

なぜなら多くの人の声が聞こえるからである，記録された人々の声々がひしめき合い，つばぜり合いをおこして，押し寄せるからである――幻聴という意味ではなくても（いやー，もしかしたら幻聴かもしれない）。先きに紹介した「火事になったらフィールドノートへ急げ」のジョークにはまだあとの半分がある。それは，「火事でフィールドノートが焼けてしまえば，きっと人をあっと言わせるすごいエスノグラフィーが書ける」というものだ。フィールドノートの中のいろんな声が，書き手に反論したり，例外をこぞって出してきたり，美化したい部分に冷水をあびせたりして，立ちはだかるからだ。フィールドノートを丹念に読んでいては，とても人を圧倒する報告書なんて書けたものではない。人類学者のフィールドノートに対する気持ちはアンビバレントなのである。

## XIV　おわりに――多声的な存在として書く

私たちの中には，社会の役割に応じた違った声がいくつも存在している――職業人としての，子どもの親としての，飲み仲間としての，など。ぼくひとりの語りの中にも，亡くなった母の声，尊敬した師匠の声，今まで読んだ本の声が響いている。私たちはいつもそのような「誰かが言った言葉」をこころの中で繰り返し，発話している――私たちの語り，口調，そして書く言葉もまずどれをとってもオリジナルではないのだ。すべて誰かの手あかのついた言葉なのだ。その意味で私たちひとり一人は，単声的ではなく，多声的な存在なのだと思う。

フィールドノートを書くときは，まさに自分の中にあるあらゆる声々を総動員して書く。でないと，ひとつの声で単調なものになってしまい記述が薄くなる。立体的な記述をするためには，自分の中のいろんな声に耳を傾けながら書く。

いっぽう，乱暴な言い方になるが，メディカル・レコードは医療者である自分という点から一斉に書かれた単声的な文書が理想かもしれない。しかし，もしその中に，ほんの一行でも医療者である自分以外の自分が口を挟んだとしたら，それはどんなものになるだろうか。

ジョン・エンブリーの書いた『須恵村』は，機能主義といういくぶん機械論的な当時の理論枠で書かれている。それは今や過去の理論として人類学ではあまり顧みられない。にもかかわらず，『須恵村』には読者を魅了する何かがある。ぼくなどはそのいい例で，自分のフィールドワーク中，『須恵村』だけは肌身離さずもっていた。フィールドワークがスランプに陥ったとき，それを携えて行き詰まりから脱するヒントを探そうと八代，人吉と電車を乗り継ぎ，そこからバスで須恵村まで足を運んだくらいだ。

その魅力の理由がなにかぼくにも長くわからなかった。しかし，それはいっしょに須恵村を訪れた彼の妻のフィールドノートにあるというのだ（河村，1987。）エンブリーの『須恵村』の中に「協

同の諸形態」という章があって,「交換労働」のテーマを扱って彼はこう書いている。

> 田植えの仕事はつらいが社会的なものである。……線を引く人が「はいっ」と叫んで，５インチあまり糸を動かす。すると人間の列はまたしゃがみ，そして苗をぽんと植える。単調な仕事は絶え間なく冗談を言ったり，時には卑猥な話をして救われる（p.122）。

きびしい労働が性の話や卑猥な冗談によってまぎらわされるという部分は，確かにもうひとつの異なる経験から書かれている。冗談や卑猥な話を村の女たちと交わしたのは,エンブリーではなく,「私は村ではよく酔っぱらっていた」と言う彼の妻の方だった。妻と村の女たちが酒を交わして冗談を言い合い，その体験の記述があってはじめて「労働のつらさを卑猥な話が救う」という一連の了解ができた。妻の見た日常の女性たちの姿を混ぜ合わせることで，エンブリーは生き生きと，それでいて理論に忠実な報告書が書けたのだ。

これは多声性が生んだ記述の一例だと思う。もともと多声的な存在である私たちも専門教育のなかで自分の中の諸々の声を押し殺すことを学ぶ。エンブリーは当時の人類学理論に忠実でありながら同時に他の声を採用して記述に成功した。としたら医学理論に忠実な記述の中に，ふだんの生活や人情の機微を捉えた言葉が一行二行あっても悪くはないかもしれない。そう思うのはぼくだけだろうか。

話された言葉とちがって，文書の言葉はそこに見えるぶん，よりリアルである。それが公的な文書ならばなおさらだろう。はなし言葉が音楽だとすれば，書かれた言葉は，その三次元（紙面，本など）をもって彫刻のようである。バフチンの表現を借りれば，その人にとって内的に説得力をもつ言葉は，権威的な言葉とは対照的に，存在感を伴ってこころのど真ん中に落ちてくる――好きな先生に書かれた通知表の褒め言葉のように。

## 文　献


Anderson, H.（野村直樹・青木義子・吉川悟訳，2001）会話・言語・そして可能性．金剛出版.

Anderson, H.，Goolishian, H.（野口裕二・野村直樹訳，1997）クライエントこそ専門家である―セラピーにおける無知のアプローチ．In：McNamee, S., Gergen, K. 編：ナラティヴ・セラピー―社会構成主義の実践．金剛出版.

Andersen, T.（野口裕二・野村直樹訳，1997）リフレクティング手法を振り返って．In：McNamee, S., Gergen, K. 編：ナラティヴ・セラピー―社会構成主義の実践．金剛出版.

Bakhtin, M. M.（望月哲男、鈴木淳一訳，1963）ドストエフスキーの詩学．ちくま学芸文庫.

Bakhtin, M. M.（伊東一郎訳，1975）小説の言葉．平凡社.

Barthes, R.（森本和夫・林好雄訳，1999）エクリチュールの零度．ちくま学芸文庫.

Bateson, G.（1972）Steps to an Ecology of Mind. Chicago: University of Chicago Press.（佐藤良明訳（1990）精神の生態学．思索社.）

Benedict, R.（1946）The Chrysanthemum and the Sword. New York: New American Library.（長谷川松治訳（1967）菊と刀．世界思想社.）

Bond, G.C. (1990) Fieldnotes: Research in past occurrences. In: Sanjek, R. (Ed.): Fieldnotes: The Makings of Anthropology. Ithaca: Cornell University Press.

Crapanzano, V. (1980) TUHAMI: Portrait of a Moroccan. Chicago: University of Chicago Press.（大塚和夫，渡部重行訳（1991）精霊と結婚した男―モロッコ人トゥハーミの肖像．紀伊国屋書店.）

Embree, J.F. (1939) Suye Mura: A Japanese Village. Chicago: University of Chicago Press.（植村元覚訳（1978）日本の村―須恵村．日本経済評論社.）

Geertz, C. (1973) The Interpretation of Cultures. New York: Basic Books.

Greenhalgh, T., Hurwitz, B. (Eds.) (1998) Narrative Based Medicine: Dialogue and Discourse in Clinical Practice. BMJ Books.（斎藤清二・山本和利・岸本寛史監訳（2001）ナラティブ・ベイスト・メディスン：臨床における物語と対話．金剛出版.）

Jackson, J. . (1990) I am a Fieldnote: Fieldnotes as a symbol of professional identity. In: Sanjek, R. (Ed.): Fieldnotes: The Makings of Anthropology. Ithaca: Cornell University Press.

河村望（1987）須恵村の女たち―あとがき．In：Smith, R.J. & Wiswell, E.L. 著，河村望，斉藤尚文訳：須恵村の女たち，御茶の水書房.

岸本寛史（2011）身体と言語とカルテ―言語化とカルテ．N：ナラティヴとケア , 2; 58-64.（本誌掲載）

Kleinman, A. (1988) The Illness Narratives. New York: Basic Books.（江口重幸・五木田紳・上野豪志訳：病いの語り―慢性の病いをめぐる臨床人類学．誠信書房 , 1996.）

Lewis, O. (1963) The Children of Sanchez. New York: Vintage Books.
Malinowski, B. (1922) Argonauts of the Western Pacific. Waveland Press.（寺田和夫・増田義郎訳（1980）西太平洋の遠洋航海者（世界の名著 71）．中央公論社．）
Malinowski, B. (1967) A Diary in the Strict Sense of the Term. Stanford: Stanford University Press.
野村直樹（1997）語りから何が読み取れるか―精神病院のフィールドノートから．文化とこころ , 2(3); 5-22.
野村直樹（2001）物語としての共文化―精神病院のフィールドノートを読み直す．文化とこころ , 5; 146-156.
野村直樹（2008）やさしいベイトソン―コミュニケーション理論を学ぼう．金剛出版．
野村直樹・宮本真巳（1995）患者－看護者のコミュニケーションにおける悪循環の構造. 看護研究 , 28(2); 49-69.
Ottenberg, S. (1990) Thirty years of fieldnotes: Changing relationships to the text. In: Sanjek, R. (Ed.): Fieldnotes: The Makings of Anthropology. Ithaca: Cornell University Press.
Rosaldo, R. (1980) Ilongot Headhunting 1883-1974: A Study in Society and History. Stanford: Stanford University Press.
Rosenhan, D.L. (1973) On being sane in insane places. Science, 179; 250-258.
Lyotard, J.F.（小林康夫訳，1986）ポストモダンの条件．水声社．
関本照男（1988）フィールドワークの認識論．In：伊藤幹治・米山俊直編：文化人類学へのアプローチ．ミネルヴァ書房．
Smith, R.J. & Wiswell, E.L. (1982) The Women of Suye Mura. Chicago: University of Chicago Press.（河村望・斉藤尚文訳（1987）須恵村の女たち．御茶の水書房．）
Tierney, P. (2000) Darkness in El Dorado: How Scientists and Journalists Devastated the Amazon. New York: Norton.
鶴見良行（1982）バナナと日本人．岩波書店．
鶴見良行（1990）ナマコの眼．筑摩書房．
鶴見良行（2001）鶴見良行著作集 11　フィールドノートⅠ．みすず書房．
鶴見良行（2010）エビと魚と人間と南スラウェシの海辺風景．みずのわ出版．
Wolf, M. (1990) Chinanotes: Engendering anthropology. In: Sanjek, R. (Ed.): Fieldnotes: The Makings of Anthropology. Ithaca: Cornell University Press.
Zeig, J.K. (1985) Experiencing Erickson.（中野善行・青木省三訳（1993）ミルトン・エリクソンの心理療法．二瓶社．）

※心と社会の学術出版　遠見書房の本※

**深奥なる心理臨床のために――事例検討とスーパーヴィジョン**

（京都大学名誉教授・浜松大学教授）山中康裕著

本書は，後進の育成において数多くの事例に対峙してきた著者の，それらのセラピーの行く末を見据えたコメントを集成した第一部と，実際の著者によるスーパーヴィジョンの逐語録である第二部からなる。セラピーの本質やセラピストが本当になすべきことをまとめた臨床実践の真髄。3,360 円，四六上製

**思春期・青年期の精神分析的アプローチ――出会いと心理臨床**

（専修大学教授）乾　吉佑著

多彩な事例研究と new object 論考など著者の集大成。臨床経験の多くを費やしてきた思春期から青年期にかけての若者と，その保護者などを交えた心理療法の実際をまとめた。精神分析的心理療法だけではなく，短期療法や親子並行面接法などクライエントの状況やニーズに合わせた幅広い心理療法が行われる。3,570 円，Ａ５並

お求めは
全国の主要書店で

株式会社 遠見書房
〒 181-0005 東京都三鷹市中原 2-4-28
TEL 050-3735-8185/FAX 050-3488-3894
tomi@tomishobo.com　※定価は税込
http://tomishobo.com

編集後記：

非常に単純に，著しく刺激的でした。“ナラティヴ”という言葉に違和感を覚えている著者の文章が，限りなく“ナラティヴ”的で，真っ向から「自分にとってのカルテ」を考えてくださる著者の真摯な態度には心が熱くなりました。悪性疾患や東洋医学の観点からは，「カルテ」から「身体と言語」の問題に進んでいく方向性も示唆され，手術記録に関わるトップナイフについての論及がさらにそれを際立たせてくれたように感じます。

数年後にまた「特集」をいただけると，企画する1年間を楽しく過ごせそうな気がします。（古屋　聡）

【執筆者一覧】

江口重幸（東京武蔵野病院）
大中俊宏（独立行政法人国立病院機構四国がんセンター）
川尻宏昭（国立病院機構名古屋医療センター）
岸本寛史（京都大学医学部附属病院）
五島朋幸（ふれあい歯科ごとう）
高木恒太朗（羽生総合病院和漢診療センター）
高橋規子（心理技術研究所）
田路　了（田路クリニック）
仲田和正（西伊豆病院）
中野一司（ナカノ在宅医療クリニック／鹿児島大学医学部）
中村伸一（おおい町国保名田庄診療所）
野口裕二（東京学芸大学）
野村直樹（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）
古屋　聡＊（山梨市立牧丘病院）
松嶋　大（国保藤沢町民病院）
松嶋秀明（滋賀県立大学人間文化学部）
村瀬嘉代子（北翔大学大学院・大正大学）
和田仁孝（早稲田大学大学院）

＊特集編者（50音順）

※本誌では皆様の「声」を求めています。本誌がカバーしたいと考える「ナラティヴ」と「ケア」の分野は，さまざまなフィールドを架橋する分野ですが，そのために，研究報告や実践報告として既存の学術雑誌などには掲載が難しい場合もあるかと思います。皆様の臨床や実践の成果をぜひともご投稿ください。詳しくは，小社編集室までお気軽にお問い合わせください。

N：ナラティヴとケア　第2号

2011年1月30日　発行
定価（本体1,800円＋税）

発行人　山内　俊介
発行所　遠見書房

〒181-0005　東京都三鷹市中原2-4-28
tel 050-3735-8185/fax 050-3488-3894
http://tomishobo.com　tomi@tomishobo.com（編集室）
郵便振替　00120-4-585728

発行・年1回（1月）

印刷　太平印刷社・製本　村上製本

ISBN978-4-904536-20-9　C3047
©Tomishobo 2011　Printed in Japan

# N: ナラティヴとケア

定価 1,890 円
毎号約 100 頁
年 1 回（1 月）発行

*Japanese Journal of N: Narrative and Care*

## 次号予告（2012 年 1 月・刊行予定）

### 特集：ナラティヴ・プラクティスを考える（編集：江口重幸・野村直樹）

ナラティヴ・プラクティス――小さな冒険への招待……（東京武蔵野病院）江口重幸
ナラティヴと科学哲学……（東北大学大学院文学研究科）野家啓一
ケアにナラティヴを入れる功罪／損得……（千葉県立保健医療大学）松澤和正
現代うつの語りを聴くこと……（帝京大学医学部精神医学教室）堀　有伸
遺伝カウンセリンとライフストーリー……（お茶の水女子大学大学院）山本佳世乃
閉鎖病棟内の患者の人生を聴く――看護をめぐるナラティヴ……（和ホスピタル）白柿　綾
総合病院でのナラティヴ・アプローチの看護実践……（田附興風会医学研究所北野病院）紙野雪香
再び病いの経験を聴く……（東京武蔵野病院）江口重幸
ナラティヴの広がりと可能性……（名古屋市立大学人間文化研究科）野村直樹

### リレー連載

私の実践とナラティヴ：アフリカ保健医療のフィールドワーク……（保健医療ワーカー）井田暁子
私の実践とナラティヴ：認知症者の生きる喜びを求めて……（藤本クリニック）藤本直規
自薦式ブックレビュー……（お茶の水女子大学）岩壁　茂
自薦式ブックレビュー……（愛知県がんセンター）小森康永

---

### 創刊号絶賛発売中　✣特集：ナラティヴ・ベイスト・メディスンの展開

バックナンバー

特集によせて：Narrative Based Medicine（NBM）は新しいパラダイムたりうるか？　（富山大学）斎藤清二
糖尿病診療におけるナラティヴ・アプローチ　（糖尿病心理研究所）杉本正毅
身体表現性障害と語り　（自治医科大学）岡島美朗
緩和医療における痛みの語り　（京都大学医学部附属病院）岸本寛史
ナラティブホーム構想とその実践　（市立砺波総合病院）佐藤伸彦
……ほか

---

### 定期購読のご案内

ぜひ定期でのご購読をお願いいたします。定期購読には，1）遠見書房からの直接発送による定期購読と，2）書店経由の定期購読があります。1）を選ばれた方は，遠見書房宛にメール（tomi@tomishobo.com）もしくは FAX（050-3488-3894）等で「送り先（〒），お名前，電話番号，N: ナラティヴとケア定期購読希望（希望号数も忘れずに）」と書いてお送りください。2）をご希望の方は，最寄の書店にご連絡いただければ，定期的に取り寄せが可能になります（定期台帳は小社が管理しております）。